

校長室より



今年の夏は、春と同じく例年とは違う夏となりました。県内にも豪雨による被害をもたらした梅雨がようやく明けた後は、連日35℃を超える猛暑とコロナ禍の第2波に襲われました。通信制課程の皆さんもそれぞれにストレスの多い大変な毎日をご過ごされたのではないかとお見舞い申し上げます。せめて秋は穏やかで爽やかな季節となってほしいものです。

さて、私自身はコロナ禍の影響で外出が減った分、読書の時間が増えました。今まで「積ん読」になっていた本を手にとることができたのは思わぬ副産物でした。その中の1冊、『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』をご紹介します。

この本は2019年に話題になりましたのでご存じの方も多いと思いますが、作者ブレンディみかこさんの息子さんが通うイギリスの公立中学校で実際に起こった出来事が描かれます。それを通して、差別や格差の問題が複雑化している社会の実態がうかがわれます。同時に、迷ったり悩んだりしながらも問題に「無防備にぶち当たって」いくたくましい中学生の姿にエネルギーをもらえる本でもあります。その中から作者と息子さんが「多様性」について語り合う場面を一部引用します。

「多様性っていいことなんでしょ？学校でそう教わったけど？」

「うん」

「じゃあ、どうして多様性があるとややこしくなるの？」

「多様性ってやつは物事をややこしくするし、喧嘩や衝突が絶えないし、そりゃないほうが楽よ」

「楽じゃないものが、どうしていいの？」

「楽ばかりしていると、無知になるから」

「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃんは思う」

「楽ばかりしていると無知になる」このフレーズには脳天を叩かれたような気がしました。自分と同種同類のものにどっぷり浸かっているのは楽だけれども、それは無知に行き着くかもしれない。異質で多様なものが混在する集団は摩擦も生じるけれども、その経験が個人の視野を広げてくれるということなのだと思います。多様性を実感したり、マイノリティーについて考えたりする経験はとても意義深いものだと改めて思いました。そして、摩擦が起こってもそれに対処していこうとするタフさや柔軟性、摩擦を恐れて異質な存在から目を背けたりしない強さを持ちたいものだとつくづく思います。

実道高校を語るキーワードの一つも「多様性」だと思います。そして目指すのは「多様なものを受け入れ認める寛容さ」です。無知や摩擦を乗り越えていくしなやかな強さに裏打ちされた寛容さ、それを培う学校でありたいと思います。

編 | 集 | 後 | 記

前期試験いかがでしたでしょうか。「しっかり準備して臨めた」「もっと勉強しておけば良かった」などなど、いろんな感想があったと思います。結果は結果として受け止めるべきですが、大切なのは次への修正だと思います。その繰り返しが積み重ねとなって皆さんの力になるはずですので、「次へ」を意識して後期へ向かっていきましょう。後期の準備としては、まずは時間割の確認。受講スケジュールを立ててみるなどしてはどうでしょうか。それと同時に、まだまだ続くコロナ感染症拡大に備えて、特に健康管理をしっかり行い、元気に生活が送れるようにして見て下さい。